



南町小だより

つよく かしこく あたたかく

平成31年 1月31日

校長 福田 俊彦

防災の要は心構え

校長 福田 俊彦

早いもので、3学期も1月を終えようとしています。6年生の教室に行くと、卒業まで「あと37日」という言葉を見ることができます。1年生は近隣の保育園の園児を招待し、一緒に遊ぶなどの交流会をしました。お兄さん、お姉さんの気持ちを味わったようでした。どの学年の子供たちも、日々の学校生活を通して、春に向かっての心構えを創っているように感じています。

さて、今年の1月17日は、あの阪神淡路大震災から24年となる日でした。当時の被災の状況を知らせる写真を展示している中で、追悼の集まりの中で、被災の現状を知らない世代が増えてきていることが取り上げられていました。地震による被害がどのようなものであったか。被災を通して学んできたことは何か。地域がどのように再興されてきたのか。そこでどのように人と人との関わりが生まれてきたのか。他地域との連携がどのように図られてきたのか。どのようにボランティアが関わってきたのか。これらのことを知らない世代にどのように伝えていくのか、活動をつないでいくのか、考えていかなければならないことが強く発信されてきました。

地震は、いつ、どこで起こるか分かりません。起こると言われても、どの程度、自分事として捉えているのでしょうか。子供たちには伝えています。「地震は、いつ、どこで起こるか分かりません。どこにいてもより安全な行動ができるようにします。そうしなければならないという心構えをもちます。」体験を通して、防災の要である心構えをはぐくんでいくのです。そして、子供は学びます。

第一に、災いに関する知識や技能を習得することです。地震が起こったらどのような危険が身に迫ってくるのか。揺れから身の安全を守るためにどのような行動をしたらよいのか。どのような場所がより安全なのか。どのような物を使った方がよいのかなどです。防災に関する基礎基本です。

第二に、想定されている災害の内容に関する情報からどのように行動したらよいのか考えること、より安全な避難行動を判断し行動に移すこと、そして、まわりに対して情報を発信していくことを体験し、「自分の命は自分で守る」力を高めていくことです。避難行動を「させられる」から「する」への力にしていくことです。

第三に、自助、そして共助です。小学生だからこそできることがあります。小学校での生活を通して身に付けたことを活かせることがあります。学校は避難拠点です。実際に避難所となった学校で、子供の活動が、勇気を届けている、元気を届けているという話を聞きます。子供だからこそその力を自覚する機会にもなります。

1月26日(土)には地域防災訓練が南町小学校で行われました。地域の方々が地域を守るために毎年行っている訓練です。そこに参加して思うことです。委員長を中心とした地域の方々のつながりの強さです。人と人とのつながりが避難拠点としての運営をスムーズにしています。人の思いが避難拠点での活動を動かしていきます。子供たちにとっても、南町小学校は避難拠点となる場所です。避難訓練、安全教育を通して身に付けたことを、そこではぐくんだ防災の要である心構えをエネルギーとして、できることをしていく場になります。大人が子供に伝えていく防災の要である心構えは、「自助そして共助」を推し進めていくことでしょう。

起こってはほしくない地震です。しかし、起こってしまったら、防災の要である心構えを働かせ、地域の一員である子供として関わられることを、ご家庭でも機会ある毎に話題にいただければ幸いです。